

にいがたの近代建築

— 明治・大正・昭和戦前期の建物 —

小林隆幸

街を彩った近代の建物

江戸時代までの建築と異なる近代以降の建築の大きな特色は、洋風化が浸透してくることです。鎖国に終止符が打たれ、中央集権的な新政府が形成されると、政府は欧米の技術を導入して近代化を進めました。その過程で日本の建築も洋風化してきました。

こうした建築の洋風化は、まず役所や学校から進んでいきました。特に新潟では開港場にもなった旧新潟町を中心に洋風建築がつくられていきました。

最初に登場するのが明治二(一八六九)年に建設された新潟税関庁舎です。現在、重要文化財に指定されている税関庁舎は、外壁にはなまこ壁や漆喰が施され、中央には象徴的な物見の塔屋を備えています。洋風建築としてつくられていますが、建設には伝統的な日本の技術が用いられています。西洋建築の技術者が少ない時代に、日本の大工が西洋建築に似せてつくったもので、擬洋風建築と呼ばれています。洋風建築とは、こうした擬洋風から始まりまし

た。明治六(一八七三)年竣工の新潟郵便役所や明治十三(一八八〇)年に完成した新潟県庁なども擬洋風でした。

常設展示室から

「出山での製塩」(模型)

『新潟市の遺跡と古代の生産』のコーナーに、2人の人物が土器を並べて火にかけている模型があります。この模型は出山遺跡での製塩の様子について、発掘調査記録を基に再現したものです。

出山遺跡は、昭和43(1968)年の新潟東港建設のための水路掘削の際に、海岸砂丘下8mの地点で発見され、翌年に緊急調査が行われました。発掘調査から、土器を使った製塩が行われていたことがわかりました。その時期は、同じく出土した須恵器から8世紀初めころから中ごろと推定されています。

確認された製塩遺構は10か所、1つの遺構の大きさは、長径1mほどの楕円形で、皿状にくぼめられています。それが製塩炉だったようです。炉には壊れた土器片が敷き詰められていました。壊れた土器片は火床に使われたようです。

製塩土器の大きさは、底部の直径が4cm~7cm、口縁部の直径が8cm~14cm、高さ17cm前後と推定されています。形は口がラッパ状に開いたコップのようなものです。加えて、製塩土器を乗せる台がありました。器台、脚台などと呼ばれます。高さ8cm程度で、直径が4cm~6cm、ちょうど製塩土器の底部の直径と同じぐらいで、中空状です。竹輪のような、あるいは、ミシン糸の糸巻きのような形というと分かりやすいでしょう。

出山での製塩の道具は、器台があること、土器が小形あること、口縁部に近づくにつれ、土器が薄くなっていることが特徴です。これは、能登から技術が伝えられたと考えられる、新潟県内の他の遺跡の出土例と異なっており、どこから製塩技術が伝えられたかは現在のところ謎に包まれています。

また、その製塩作業・技法についても多くは明らかではありません。みなとびあでは、2010年に体験講座「塩をつくる」を開催し、参加者とともに出山遺跡の出土例を元に古代の製塩実験を行いました。その詳細については当館の研究紀要第7号に報告しています。実験を通して、器台があるため土器が火を受ける位置が高くなり、製塩土器内の鹹水が沸騰する効率が良くなると感じられました。また、製塩土器が小形であることで土器への熱伝導が効率的になっているのかもしれません。

出山での塩生産はその遺跡の規模から大規模なものであったと考えられます。この地は、海岸砂丘という、塩の元である海水は豊富にあります。風の影響を受けやすく、燃料となる薪を手に入れにくい立地です。ここで塩を生産していた人々は、限られた資源を効率的に運用する技術を身に付けていたと想像できます。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)



出山製塩遺跡再現模型(奈良・平安時代)



鍵三銀行(大正6年竣工)

在したこの学校は、県内各地から集まった生徒に新しい学問を施しました。洋風の学校は新しい文化が新潟に入ってきた時代を象徴する建物でした。

明治時代後半には本格的に西洋建築を学んだ日本の技術者も増え、新潟の西洋建築も本格化します。明治四十三(一九一〇)年竣工の新潟師範学校は外壁にレンガを施した重厚な木造の建物で、中央に大ドームを備えていました。同年竣工の新潟市役所庁舎は、東京で事務所を構える建築士・三橋四郎が耐火性と外観の美しさに配慮して設計した建物でした。

一方、一般の住宅や町屋と呼ばれる商人や職人の店舗兼用住宅は、これまで通り伝統的な姿を留めていました。伝統的な家並みに、西洋建築が点在していたのです。

大正十二(一九二三)年の関東大震災以降、防火・耐震に優れた鉄筋コンクリート造の建物が普及します。その構造と古代ギリシャ・ローマの建築を模範とする古典主義の意匠が、昭和初期を中心に銀行など企業の店舗に採用されました。昭和

消える建物、守られる建物

二(一九二七)年竣工の第四銀行住吉町支店・沼垂支店、翌三(一九二八)年新築の本店はいずれも鉄筋コンクリート造で、正面の列柱が印象的でした。

戦後、都市化とともに都市の郊外化が進み、生活スタイルの変化も伴って街は変貌しました。建物もつくり変えられ、現在の街の建築物のほとんどは戦後のものが占めています。

そして近年、次々に姿を消していく近代建築を惜しむ声も聞かれるようになり、市民を中心とした建物の保存運動も展開されるようになりました。

第四銀行住吉町支店の保存運動は、柳都大橋から続く万代島ルート線の建設に端を発します。道路建設計画で取り壊わし対象になったことで、平成十(一九九八)年から保存運動が本格化しました。市民による保存団体が組織され、署名活動やシンポジウム、関係機関への陳情などの運動が展開されました。そして、建物は第四銀行から新潟市が譲り受ける形で保存され、新潟市歴史博物館の敷地へ移築されました。平成十一(一九九九)年に日本銀行新潟支店長役宅が日銀による資産整理として売却されることになった際にも、市民グループが新潟市での購入を要望する運動

を起こしました。新潟市がこれを買取り、現在「砂丘館」として一般公開されています。

旧新潟県副知事公舎は、平成十六(二〇〇四)年に県の財政再建のため売却されるとの方針が伝えられたことで市民が動きました。県は保存を決定して、平成二十(二〇〇八)年から民間が運営するレストランとして活用されています。

旧斎藤家別邸は戦後所有していた会社の経営難から売却が検討されました。平成十九・二十年に市民を中心に保存運動が行われ、新潟市が購入することで保存されました。

こうした保存された近代建築は、改修工事がなされ新たな機能をもって再生し、市民や県民の財産として活用されています。

本展のねらい

本展では、新潟市の近代に現れた建物を写真で紹介し、また、先に示した市民による建物の保存運動や、保存され再生された建物もあわせて紹介します。本展を通じて新潟市の歴史を近代建築から感じ取っていただくとともに、現存する建物については、歴史遺産としての今後のあり方を考える機会にしていきたいと思えます。

(こばやし たかゆき 学芸員)

おすすめの1冊

茶の本(岩波文庫)

ひとりの茶の香から一国の盛衰を、さらには世界の調和を説いた文明批評。日本美術院をおこし、晩年ポストン美術館に招かれた著者(岡倉天心)が、明治三十九(一九〇六)年アメリカで出した英文原著の和訳です。古今東西を自在に駆け、湧き出る知と情のことは簡明にして的確。厚さわずか五ミリの文庫本。さしずめ手のひらに隠れる一冊の茶室というべきでしょうか。

天心は新潟にきたことがあります。美術院の新潟巡回展を前に、行形亭で講演をしたのです。そこで説いたのは、伝統回帰と革新性。矛盾をあわせ呑む大胆な主張です。もともと、展覧会は不評でした。新旧東西を驚つかみにした横山大観の奇跡的な筆が、ちよつと刺激的すぎたでしょうか。「美術」がまだ新鮮だった、明治三十三(一九〇〇)年のことです。

傑作と通じる心のあり様を、天心は「互譲の精神」と述べます。功罪諸説ある人ですが、巨人には違いありません。まあ、茶でもすすりながら読みませんか。来年、天心が没して百年になります。

(木村一貫 学芸員)



岡倉覚三 著 / 村岡博 訳
岩波書店 2007年改版
(原書 THE BOOK OF TEA)
フォックス・タフィールド社
1906年)